

童話『モッコちゃんのコーヒー店』（前編）

二十三回生 黒澤（保富） 琉美子

古いアパートの二かいに、ひとりぼっちのおばあさんが住んでいました。

アパートの庭にあじさいの花が咲くころ、五十年もいっしょにくらしたおじいさんが死んだのです。おばあさんは悲しくて、毎日々々せなかを丸めて泣いてばかりいました。

でもある日、おばあさんは泣くのをやめて、庭をながめました。庭には、やさしいコスモスの花が咲きはじめていました。もうあれから三カ月もたっていたのです。

「やれやれ、おじいさんは、泣き虫の私なんかすきじゃなかったよね」

それからおばあさんは、てきばきはたらきはじめました。部屋をびかぴかにみがきあげて、おじいさんのものを片づけはじめました。

おじいさんは、絵をかくのがすきでしたから、絵の道具やたくさん絵がありました。

部屋のかべには、よれよれになったジャンパーも、ぶらさがっていました。絵の具やあぶらのしみがいつぱいつき、野山をスケッチしてあるいた時のかぎざきもあるジャンパーです。

おばあさんはジャンパーを手にとって、なでたり、うらにかえしてみたりしました。うらには、あ

たたかい茶色のもこもこした布がついています。それは、まるでぬいぐるみの動物のようでした。

おばあさんは、とつぜん楽しいことを思いつきました。大きなはさみを手に持つと、ちよきちよき、ちよきちよき、ジャンパーを切りはじめました。それから、切りぬいた丸や三角をぶちぶちぬい合わせはじめたのです。

その日、夜おそくまでかかって作りあげたのは、ぬいぐるみのねこでした。おじいさんのおいのするねこは、ひどくおばあさんの気に入りました。モッコちゃんという名前もつけました。

以前はおじいさんとふたりで、毎ばん八時に、コーヒーをのんでいたました。窓のそばにちいさなテーブルといすをおいて、「コーヒー店」とよんでいたました。

おばあさんがコーヒー豆をひくと、おじいさんはアルコールランプに火をつけ、部屋のあかりを暗くして、ガラスのコーヒーわかしでぼこぼこコーヒーをわかすのです。

レコードをかける時もありましたし、ほがらかにおしゃべりすることも、ただだまっつもの思いにふけることもありました。

おじいさんが死んでからは、このコーヒー店のこともわすれていました。

「モッコちゃんがいるから、あしたからまた、コーヒー店を開こうかいね」

おばあさんは子どものように、モッコちゃんに話しかけながらねむりました。

*

*

つぎの日の朝、おばあさんは、ひさしぶりにさわやかに目をさしました。

「モッコちゃん、おはよう！ 今日、コーヒー店を開こうね」

おばあさんは、モッコちゃんをいすにすわらせて話かけました。

庭に出ると、おいしい朝の空気をいっぱいすって、花をつみました。テーブルにレースのテーブルかけをかけ、花をかざると部屋じゅうがぱつと明るくなりました。モッコちゃんがいるだけで、こんなに楽しくなるなんて！ ラララ、ラララ、おばあさんの口から、歌までこぼれ出てきました。

「お店のせんでもしなくちゃ」

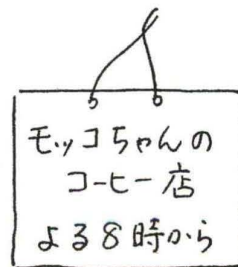
おばあさんは、ボール紙で小さなかんばんを作りました。

おばあさんは、モッコちゃんの手にかんばんをぶらさげ、

テーブルの上に立たせました。これで「モッコちゃんのコーヒー店」

の出来上がりです。モッコちゃんは、コーヒー店の主人です。

その日夜八時になると、おばあさんはコーヒーひきに豆をいれて、いそいそとひきはじめました。丸いにぎりを持ってぐるぐるまわすと、コーヒー豆がつぶれてこうばしいかおりが流れます。



ぐる、ぐる、ぐる。ぐる、ぐる、ぐる。

おばあさんの胸の中にも、思い出がこうばしいかおりをただよわせてうず巻きはじめました。その時です。

ドアがことごと音をたてたようでした。ノックのような、ただ風がならしているような音でした。おばあさんは豆をひくのをやめて、耳をすましました。すると、今度はたしかに小さなノックの音がします。

「ごめんください。モッコちゃんのコーヒー店はこちらでしょうか」

すんだ明るい声が聞こえました。

「ま、お客さまかね！」

おばあさんは、大いそぎでドアをあけました。ドアの外のうち暗いろうかに、やさしいあかりをともしたように、わかい女の人が立っていました。

「さ、どうぞどうぞ」

おばあさんは、この人にどこかで会ったような不思議な気持がしました。

女の人は、花のかおりのする風といっしょに、部屋の中へ入ってきました。入口でくつをぬぐわけでもなく、すべるように軽くいすにこしかけました。そしてモッコちゃんをだくと、なつかしそうにほお

ずりをしました。

お客さまがくるなんて！ おばあさんは、うれしくてたまりません。アルコールランプに火をつけると、部屋のあかりを暗くしました。女の人は、青いほのおのむこうにかすかにゆれています。

コーヒーわかしがぼこぼこ音をたてはじめると、おばあさんは思いつたようにたずねました。

「あのう、しつれいですが、どなたさまでしたかね。私はこのごろ、すっかりものおぼえが悪くなつてね」

おばあさんは、はずかしそうにかたをすぼめました。

「さあ、私、自分のことがあんまりよく分からないのです。私は、ただいつも野原を吹いているだけなのです。小さい花を咲かせながら・・・」

「へえ、野原を吹くって、あなたは風さんなんですかねえ」

「さあ？ たしかに風ともいえないようです。私は、だれかの奥さんのような、それからおなかの中には、愛する人の赤ちゃんがいるような、そんな気持ちもしているんです」

女の人は、首をかしげてほえみました。かみの毛が、風に吹かれたようにゆれました。

おばあさんには、何がなんだかさっぱり分かりません。でも風だろうとなんだだろうと、こうして目の前に人がすわっているのですから、うれしくてたまりません。

ランプのほんのりとしたあかりの中で、熱いコーヒーをふたりでのみました。だまっているのに、やさしい風がおばあさんの心の中で吹いてきて、とてもしあわせな気分になるのです。

「おいしかったわ、ごちそうさま。もう帰らなくては」

女の人はふいに立ちあがると、すんだ目でおばあさんを見つめました。そして、入ってきた時と同じように花のかおりのする風をのこして、ドアの外へ出て行きました。

「あっ」

その時、おばあさんは女の人の首に、まるで絵の具のしみのような小さな赤いあざをみたのです。

おばあさんは、これで女の人だれか分かったような気がしました。

そして、ドアの上にかかっている絵を見上げました。それは、おじいさんがわかいらかいた「春の風」という絵です。

わかったおばあさんをモデルにして、野原の小さい花を咲かせながら吹いている、風の精をかいたものでした。

そうです。おばあさんの首筋には、いまでも小さな赤いあざが、絵の具のしみのようにあります。

長い間かかってその絵が出来あがった時、おじいさんはこういったのです。

「このやわらかいかみの毛のかげに、小さなあざもかいといたよ。おなかの中には、赤ちゃんもね。」

これは、ぼくの心をやさしく吹いてくれる春の風でもあり、おまえでもあるのさ。うん、われながらよく出来たなあ」

そして、出来上がった絵をふろしきにつつむと、絵の先生のところへ元気いっぱい出かけたのでした。その日の夜ふけに帰って来たおじいさんは、おさけをのんで、ぐでんぐでんによっていました。

「くそっ！ 少女小説のさし絵のようだと！ こんなもの焼いてしまえっ」

おばあさんは、その絵が大きいでした。それで、なげ出された絵を、そっと洋服ダンスのうらにかくしました。

その絵をドアの上にかざったのは、長い間つとめた学校の先生をやめて、この小さなアパートにこしえて来た時からです。

おばあさんが絵をかけた時、おじいさんは何もいませんでした。でも時々、ひとりでなつかしそうに絵を見つめていました。おじいさんも、「春の風」の絵がすきだったにちがいありません。

おばあさんは、不思議な出来事がなぜおこったのか、考えはじめました。

まず思いあたるのは、ジャンパーからぬいぐるみのねを作ったことです。このモッコちゃんに、もしかしたら不思議な力があるのかもしれない。

それから次に、ひさしぶりにコーヒー店をはじめたことです。

八時に豆をひきはじめると、おばあさんの胸の中で思い出がうず巻きはじめ、あのドアの上の絵の中の人はずねて来たというわけです。

「あそこに絵をかければ、絵の中の人がコーヒー店にやってくるというわけかね」

おばあさんは、この思いつきに胸をおどらしました。

おばあさんには、どうしても会いたい人がいました。それは、たった八才で、海でおぼれて死んだむすめのゆう子でした。

おばあさんは、押し入れの中からゆう子の絵をだしました。コスモスの花畑の中でわらっている絵です。それを、「春の風」の絵とかけかえました。

つぎの日一日、おばあさんは心配で心配でたまりません。モッコちゃんをだいては

「おまえの力で、ゆう子に会わせておくれね」と、ささやいていました。

夜八時になると、おばあさんはコーヒー豆をひきはじめました。

ゆっくり ゆっくり・・・おちついて おちついて・・・

ぐる、ぐる、ぐる。ぐる、ぐる、ぐる。

こうばしいかおりが、おばあさんの胸の中でうず巻きはじめました。

すると、ばたばたと音がして、

「こんばんは！こんばんは！」

元気な声が、ドアの外ではずんでいます。

「いま、いまあけますよ」

おばあさんは、あわてふためいてドアをあけました。

たしかに、あの元気なゆう子がとびこんで来ました。おばあさんが、何十年も会いたい会いたいと思いつづけたゆう子が、いま目の前にいます。

ゆう子は、不思議そうにあたりを見まわすと、テーブルの上のモッコちゃんをだきました。春風の女の人がしたように、ゆう子もほっぺにモッコちゃんを押しつけています。

「ねえ、モッコちゃんて、なんだかパパのにおいがするわ」

それから、豆をひいているおばあさんのそばへ来ました。

「モッコちゃんのコーヒー店で、ちょっとかわつてゐるのね。ふつうのおうちに、おばあさんひとりで……」

おばあさんはコーヒーひきをぐるぐるまわしながら、目のおくから押しよせてくるなみだの波を、おさえるのにけんめいでした。ゆう子に話しかけたいけれど、声を出すと何かがばくはつしそうでした。

アルコールランプに火をつけて、いつものように部屋のあかりを暗くしました。

「うちのパパとママもこうするの。でもあたしは、のませてもらえないのよ。モッコちゃんのコーヒー店は、子どもにものませてくれるの？」

おばあさんは、部屋の暗さにまぎれてにじんだなみだをふくと、やつとかすれた声を出しました。

「もちろん、のませてあげるよ。だけど、いったいどうやって、ここへ来たのかね」

「あのね、きょう、お庭であそんでいると、すつごく不思議なことがおこったの。コスモスの花畑のそばに、ぬいぐるみが立っていたの」

ゆう子は、目をくりくりさせてつづけます。

「ほら、このモッコちゃんよ。だれかがおっことしたのだと思って、ひろおうとしてそばへいったら、モッコちゃんはスーってにげるの。おいかけると、かきねのところにとっぜんドアがあらわれて、モッコちゃんはその中に入ってしまったの。ドアはパタンとしまったきり、もうひっぱってもあかないの」「そりやびつくりしたろうね」

おばあさんは、昔、ゆう子と住んでいた家を思い出しました。庭に野菜や花をいっぱい育てていました。コスモスのたねは、ゆう子がまいたものです。

「大いそぎでママをよんできたけど、もうどこにもドアはなかったの。ママは、げらげらわらってあ



2代目 モッコちゃん

たしの話を信じてくれなかったわ。でもね、夜八時からつかいてあったからこつそり八時に庭に出てみたら、ドアが見えたの。それで、ママにも何もいわないで来ちゃった。だってドアが消えたらたいへんでしょう？」

ゆう子は、ふうつと大きなため息をつくとき、ミルクのたつぷりと入ったあまいコーヒーをぐんと飲みました。

「ああおいし！」

ゆう子は、おばあさんをみつめてにっこりしました。

「ねえ、それでモッコちゃんのコーヒ―店は気に行ったのかい？」

「もちろんよ！」

「じゃ每ばん、ここへ遊びに来ないかい？ パパやママにはないしよで、そうすると、おばあさんうれしんだけど」

「いいわ！ 每ばん来るわ！」

次の日から、ゆう子は元気にやってきました。

おばあさんは、以前ゆう子のママだったころ、ゆう子に作ってやったように、ケーキやゼリーをいっしょうけんめい作りました。

ある日、ゆう子は、ケーキを一口たべると、ちよつと首をかしげていました。

「おばあさんのおかし、ママの作るのにてる。でも、ママのほうが、ちよつとおいしいみたい」

次の日、おばあさんは遠くまで出かけて、評判のおいしいケーキを買ってきました。

すると、そういう日にかぎって、ゆう子はいうのです。

「きようは、おなかいっぱい！ だって、今日のばんごはんはね、すごくおいしくて食べすぎちゃったんだもの。それより、何かもつとおもしろいことないの？」

ゆう子がここへ来るようになって、何日たったでしょうか。ゆう子はここへ来るのがだんだんたいくつになっているようでした。モッコちゃんをだいて、つまらなそうにしていることが、多くなりました。

「お人形がほしいかい？ 買ってあげようか」

おばあさんは、何とかゆう子の気持をひきとめておきたいと思いました。

「ううん、いらない。あたし、売ってるお人形より、モッコちゃんがほしいな。パパのにおいがして大きい」

おばあさんは、こまりました。このモッコちゃんは、世界でただひとつの不思議なぬいぐるみです。今ではコーヒ―店の主人です。このぬいぐるみがなくなれば、ゆう子にも会えなくなってしまうでしょう。モッコちゃんのいないくらしを考えると、おばあさんはぞっとしました。

「ごめんね、だめなんだよ。モッコちゃんは、この店の主人だからここにいなくちゃね。モッコちゃんに会いたかったら、ここへ来ておくれ」ゆう子は、つまらなそうに帰って行きました。

次の日に、おばあさんは、いつものとおり豆をひきはじめました。でも、ゆう子はなかなかあらわれません。

おばあさんはからだをかたくして、ゆう子を待ちました。

「来ておくれ、ゆう子。おねがい、来ておくれ」

時計のカチカチいう音を聞きながら、おばあさんは祈りました。

八時半、九時、十時……

とうとうその日、ゆう子は来ませんでした。

次の日も、その次の日も、ゆう子はきませんでした。

「もう忘れてしまったのだろうか」

おばあさんは、かたをおとしてモッコちゃんをひざにのせました。

「本当は、私はいけないことをしていたのじゃないだろうかね。私は、そりやあ昔は、ゆう子のママだった。でも、今の私は何だろう。ゆう子には、ふたりの母親なんて必要ないんだ。でも、モッコちゃんのおかげで、生きたゆう子に会えて、本当にうれしかったよ。ありがとうね。でも、これ以上あの子

に会っていると、私はあの子を部屋にとじこめて、運命にさからうようなことをしかねなかった。これでもいいのさ」

おばあさんは、ドアの上から、ゆう子の絵をはずしました。

(つづく)

皆様へ

この童話の作者 黒澤 琉美子さんは、千里山会誌 創刊号に「扇の町」、第五号に「家族ゲーム」という詩を載せていただいております。黒澤あぐりの名前で「詩集 薔薇の旅人く兄と妹の物語」(花神社)を出版されています。

さて、このあと、どのように展開していくのでしょうか。後編を楽しみにして下さい。次号で完結です。

『モッコちゃんのコーヒー店』を読んで

二十一回生 平田 坦

このお話を子供たちもきつとほのぼのとした気持ちで読むことでしょうが、子供たち専用としてしまうのは勿体ない気持ちです。

自分と同年配、或いはもっと先輩の高齢者にも読んでもらいたい爽やかで心温まるお話です。

読み進みながら心にほんのりとした灯火が点きましました。老人に夢を持ってもらうため「老人のための童話」として広く知人たちに紹介したいお話です。

黒澤琉美子さんのような素晴らしい作家と同じ千里山会に所属していることを誇らしく思っています。

二十七回生 萩原 直大

昔、私も定年になれば童話を書きたいと思ったことがあります。しかし既に、定年を過ぎておりますがそのことはすっかり忘れていました。「モッコちゃんのコーヒー店」を読み、思いだしたのですが、同時に童話とは感性で書くものと悟り、とても私には書けないことを知りました。

童話は詩人のような方にしか書けないのではないかと感じております。酒と麻雀、ゴルフが大好きな人間、私のようないたって俗人にはとてもとても『童話と詩人は想像力のかたまりみたいなものだ』シェイクスピアの『真夏の夜の夢』のパロディー

私の知る昔の友人で、連れ合いを亡くした方は何人かおられます。ただその中で、男性はともかく、女性で再婚された方はおられません。モッコちゃんのおばあさんに似た方はおられますが、多くの女性は「面倒臭い」、「もうこりこり」というもの。さてわが奥様はどちらだろうか？